▶夏の研修会報告（中堅教員リトリート、関東地区新任教員研修会、関西地区夏期研修会、全国災害支援連絡会議、関東地区聖書科研究集会、教員リフレッシュ合宿）〈２～４面〉
▶公募〈２面〉
▶聖書のことば〈３面〉
▶わたしたちの奉仕活動（関西学院初等部）〈４面〉
▶キリスト教Ｑ＆Ａ〈 〃 〉
▶行事予定〈 〃 〉

キリスト教学校教育 10

２０２４・２０２５年度教研テーマ
新たな時代におけるキリスト教学校の使命と連帯―いのちの輝きと平和を求めて―

（一社）キリスト教学校教育同盟
〒169―0051
東京都新宿区西早稲田２－３－18
日本キリスト教会館72号室
電　話　03（6233）8225
ＦＡＸ　03（6233）8226
理事長　西原　廉太
編集人　田村　浩一
頒価200円（加盟法人の購読料は会費に含まれています）
（毎月１回１５日発行）

創立者たちの心に思いを寄せて

神の国は、聖霊によって与えられる義と平和と喜び
（ローマの信徒への手紙14章17節）

大川　義（ただし）

キリスト教学校教育同盟のすべての学校には、それぞれの始まりがあります。そして、その始まりは、まず人の心から始まっています。その人の心の中にキリストが住み、その平安と喜びがその心を動かしました。キリストが住んだということは、聖書が私たちに伝えるイエスの言葉、「わたしは、平和をあなたがたに残し、わたしの平和を与える。わたしはこれを、世が与えるように与えるのではない。心を騒がせるな。おびえるな。」（ヨハネによる福音書14章27節）の通りです。イエス・キリストが与える平安を体験したからこそ、この神とつながった、この平安を多くの人にも体験してもらいたいという願いが生まれ、それを実現すべく多くの人々が祈り、働きかけ、キリスト教の学校が次々と創立されました。

私が所属する共愛学園も、三人の若い女性が「女子に教育を」「キリスト教主義の教育を」「英語の教育を」と願い立ち上がったことから始まりました。その三人のうち、不破キヨ（不破唯次郎牧師の妻）と村山ユキの二人は神戸女学院の卒業生でした。笹尾ぬいは現在の女子学院のルーツである原女学校の卒業生でした。この三人の女性たちが、キリスト教学校を創るために尽力し、ついに学園が創立されました。彼女たちは、「イエス・キリストを人々に知ってもらいたい、若い魂に伝えたい」という願いから活動していたのです。彼女たちの心の中に主イエスが住んでおられたからこそ、その働きが可能でした。

明治時代初期の群馬県では、新島襄が禁を犯してアメリカへ渡り、帰国後安中に戻った際、龍昌寺でキリスト教講話を行い、彼の滞在は一時的でしたが、多くの人々がクリスチャンとなりました。この人々が三人の女性たちを助け、教会の婦人たちは毎日米を研ぐたびに、一握りの米を取っておき、それをお金に換え、それを寄付したのでした。この活動は「レプタ献金」と呼ばれ、多くの奇跡的な力が働いて、学園の創立に至ったのです。

創立当初の中心にいた人々の書簡を見ても、主に心ゆすぶられて、心にある信仰を表白し、その文中に「神の国を実現する」という言葉も見受けられます。この「神の国」を伝えたいという一人ひとりの熱い祈りと願いが形となり、キリスト教主義の学校が設立されました。その設立に働いた力は、まさに神の力によるものです。

「神の国は言葉ではなく力にあるのです。」
（コリントの信徒への手紙一４章20節）

主がその計画を持っておられましたし、現在もその計画は進んでいます。ですから常に私たちは「神の国の実現」を心にいだきつつ、主の望まれることを示していただき、働いてまいりましょう。

〈共愛学園　学園長〉

第66回学校代表者協議会

11月1日（金）2日（土）

（学）啓明学院で開催

第66回学校代表者協議会が11月1日（金）17時40分～19時45分、2日（土）9時30分～16時30分、啓明学院（神戸市須磨区）のランバスチャペルで開催されます。

本協議会は、各加盟学校法人の教学・経営に責任を持つ方々が情報を共有し、学校運営を具体的に協議、新しい方向性を見出すための会議です。

今回の主題は「新たな時代におけるキリスト教学校の使命と連帯―いのちの輝きと平和を求めて―」。啓明学院の院長、中高校長による同校の歴史と教育についての講演の後、発題では教育の新たな取組みを開始した2校の報告があります。それらを基に各法人を代表する方々によるグループ討議を行います。

申込みはグーグルフォームズへの入力をお願いします。郵送された開催要項のQRコード、または教育同盟HP（「教職員の方」→「同盟事務局」→「学校代表者協議会」）にあるリンクよりお入りください。申込締切は10月16日（水）。

〔会場校紹介〕
啓明学院
1886年、J.W.ランバス、W.R.ランバス親子によって創設されたパルモア学院に起源をもつ。1923年、女子部を独立させ、C.G.ハランド女史を初代院長としてパルモア女子英学院が誕生、実用英語を重視した教育がなされた。1940年、「啓明女学院」と改称。

2002年、新しい時代に向けて建学の精神を見つめ直し、関西学院との間に教育協定を結び、中学・高校・大学、十年一貫教育を行う男女共学の「啓明学院中学校」が、2005年に「啓明学院高等学校」が発足。現在1200名を越える生徒が中学と高校に在籍。

2024年 夏の研修会報告

第66回中高研究集会開催報告

西南地区研修会（第74回夏期学校・第45回中高部会・第61回大学部会）合同開催

第66回中高研究集会は「新たな時代におけるキリスト教学校の使命と連帯―いのちの輝きと平和を求めて―」との主題のもと、8月1日（木）～2日（金）の日程で西南学院中学校・高等学校を当番校とし、福岡での開催となりました。昨年度の東北・北海道地区担当の集会と同様に、西南地区第45回中高部会との合同開催（参加者50名）となったことに加え、新たに地区恒例の第74回西南地区夏期学校・第61回西南地区大学部会との合同開催という性格を持つ集会となりました。会場として西南学院大学と中高の施設を利用しました。

樋口紀子西南地区代表理事（梅光学院理事長）の開会挨拶の後、青木麻里子氏（福岡女学院宗教主事）によって、イザヤ書60章1節とエフェソの信徒への手紙5章6～10節から「光を放て～暗闇のチョウチンアンコウ～」と題する開会礼拝での奨励をいただきました。

今回の合同集会（参加者総数101名）の基調講演は、横田法路師（油山シャローム教会牧師・NPO法人九州キリスト災害支援センター理事長）によって、両日2回にわたり『人はいかにして成長するのか』と題して行われました。講演の中で、横田師は人の成長を促す要素として、「アガペーの愛」「真理」「共同体」「苦難」の4つを挙げ、聖書のみ言葉とご自身の体験の中から4要素の働きと意味、また相互の関係について具体的かつ簡明に語られました。キリスト教学校という共同体の中で、生徒と教職員が何をきっかけに成長していくのかを考える深い学びの時となりました。

講演の後は、大学部会と中高部会に分かれ、分団討議Ⅰが行われました。中高部会の冒頭で、中高に特化した事例報告として、「探求学習」の取組みについて、伏貫恭子氏（西南学院中高総合的探求委員長）による発表が行われました。その後、約10名で構成する5つのグループに分かれて、探求学習、講演の感想、各学校の課題などをテーマに自由に話し合いがなされました。

夕方からは会場を近くのホテルに移して、黒木佐幸氏（西南学院小学校校長）の司会で情報交換会が開かれ、北は仙台から南は熊本までの参加者の紹介と各校の近況報告がなされ、和やかな雰囲気の中で交流を深めることができました。

2日目は、西南学院中高のチャペルでの朝礼拝から始まりました。奨励は三上梓氏（西南学院中高宗教主任）により、マタイによる福音書28章1～10節から「おはよう」と題して行われました。

礼拝の後、記念写真撮影を行い、横田師による第2回目の講演が行われました。特に映像による九州キリスト災害支援センターの働きの紹介がなされました。その後、3グループに分かれて西南学院中高の施設見学が、中高生徒会による案内で行われました。

昼食を挟んで、前日と同様に部会ごとの分団討議Ⅱが行われ、第2回目の講演を聞いた感想や各校の課題に関する意見交換を行いました。その後は、中高部会・大学部会合同での全体協議の時を持ち、A～Jの各分団による発表が行われました。閉会礼拝では、宮崎隆一氏（西南学院理事長）がコヘレトの言葉12章1節から「青春の日々にこそ」と題する奨励が行われ、樋口紀子氏の閉会挨拶をもって研究集会は感謝のうちに閉幕となりました。

早川　寛
〈西南学院中学校・高等学校校長〉

樋口紀子氏

生徒たちが施設を案内

横田法路氏による講演

西南学院中学校・高等学校チャペルにて

西南地区 第64回新任教師オリエンテーション

8月1日には中高研究集会に先立ち、午前中に西南地区新任教師オリエンテーションが実施されました。開会挨拶と開会礼拝に続き、演題「キリスト教学校に勤めるということ―建学の精神からの考察―」として、西南学院中学校・高等学校の早川寛校長による講演がありました。

西南地区の9法人から59名が参加。共に講演を聴き、建学の精神が今も確実にキリスト教学校の教育の根幹に据えられ、証しされていることを学びました。

加盟校動静

名古屋学院大学
因田義男氏が8月2日付けで理事長を退任、8月3日付けで西中利也氏が後任に就任。

研修案内《申込み締切日が近づいています》

第10回キリスト教看護教育推進会議
日程＝11月9日（土）　締切＝10月18日（金）
会場＝活水女子大学看護学部
＊教育同盟HP「教職員の方へ」→「同盟事務局」→「各集会案内・連絡事項」で要項をダウンロード、申込み用フォーマットにも入れます。

第11回中堅教員リトリート（節目研修）

発題

「変わらないものと変わりゆくもののはざまで」

7月29日（月）～31日（水）、同志社大学同志社びわこリトリートセンターを会場に開催されました。参加者・講師・スタッフは計23名。

主題は「新たな時代におけるキリスト教学校の使命と連帯―いのちの輝きと平和を求めて―」とし、発題を中島昭子先生（捜真学院学院長）、礼拝は小島慈美先生（捜真バプテスト教会牧師）が担当されました。

中島先生は、初日午後と2日目午前の2回、各90分に分けて、キリスト教学校に本当に大切なもの、変えてはならないものは何かとの根源的な問いかけをされました。先生ご自身の教員生活等を振り返りながら、キリスト教学校にある価値観や教師として遣わされたその意味を振り返る重要性を指摘されました。教育が目指すべきもの、生徒に寄り添える教師であったか、愛があったのか等、聖書の言葉を引用しユーモアを交え、じわじわと心の奥底に届くようにお話しされました。私たちが生徒に関わることの喜びや難しさ等をご自身の失敗も含めて率直に語られ、参加者は頷きながら聞いていました。中堅教員は多忙でゆっくり考えることや振り返る時間さえ十分に持てません。だからこそ自分を空っぽにして見つめ直す重要性を指摘されました。

講演後には沈黙の時間を各1時間程度持つことが出来ました。各自、黙想し自己を振り返る時間は好評でした。

牧師の小野先生は、期間中4回の礼拝を通じて聖書の言葉をわかりやすく、具体的にイメージできるように伝えてくださいました。初日夕礼拝はブドウ園の譬えから「有用性の価値」と「存在性の価値」について語り、私たちの両手に神様から等しく1デナリオンを預かっていること等、各礼拝がとても豊かで慰めに満ちた素敵な時間でした。私たちの手本はイエス・キリストであり児童生徒の手本は教師です。すぐ答えを見つけずに神様に委ねる「希望」の大切さにも気付かされました。

ある参加者は「奉職してこれまで20数年間、余裕無く無我夢中で走ってきました。この3日間で心身共に解放され『人生の途中下車』をすることができました。」と笑顔で感想を述べられました。

リトリートとは「休養・静養」の意味があります。教師として生かされ今後の教員生活を考える上でもとても重要な機会になることと思います。より多くの皆様のご参加をお待ちしています。

施設を使わせていただいた同志社大学の皆様に感謝を申し上げます。

清水広幸〈聖学院中学校・高等学校副校長〉

中島昭子氏

小野慈美氏

全体会

関東地区 第66回新任教員研修会

「キリスト教学校に勤めるということとは
―見えるものと見えないもの、外なる人と内なる人―」

8月1日（木）～3日（土）、YMCA東山荘を会場に行われた関東地区第66回新任教員研修会には48名の参加者が与えられました。

開会礼拝では大橋邦一委員（静岡英和女学院中学校・高等学校）が「私たちはすぐに答えを求めようとするが、聖書には答えは書かれていない。自分で気づくかどうかが問われ続けている。」と「よきサマリア人」をテキストに話され、研修会がスタートしました。

清水広幸委員（聖学院中学校・高等学校）によるアイスブレイクで交流した後は、前横浜英和学院学院長・磯貝曉成先生による主題講演。「キリスト教学校に勤めるということとは―見えるものと見えないもの、外なる人と内なる人―」をテーマに、「人生の始まりは一対一で目の前にいる生徒と向き合うこと」『あなたは誰』と問われたときにどう答えるのか」「自分の居場所を自分で作り出すための祈り」など多岐にわたる話題を大変エネルギッシュに話されました。

二日目の朝拝は久保哲哉チャプレン（聖学院中学校・高等学校）が「聖書では人生という『競走』を最後まで走れるように、イエス・キリストが共にいてくださると伝えている。これを伝えるのがキリスト教学校である。」と話されました。

続く発題の時間では、五所美穂先生（玉川聖学院中等部・高等部）からは「キリスト教学校にはノンクリスチャンの教員が必要で、異なる立場の教員がいるからこそ組織として成長する」と、また吉川貴絵先生（立教女学院小学校）からは「ゆるすとは、その人をそのまま受け入れること。祈りは毎日人のために使える時間のこと。」と伺いました。新任の先生方にとって身近なお話で、分団協議でも多く話題になっていました。

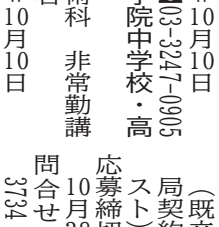
「キリスト教Q&A」では、大橋委員と伊藤多香子委員（関東学院六浦中学校・高等学校）から、キリスト教学校が期待する人間像と「道徳教育」との違いは何かなどのお話がありました。

三日目の朝拝は大西哲也校長（明治学院中学校・東村山高等学校）の担当で、「醤油づくり」を例に、「蔵」に染み付いているキリスト教学校の独特の風味を、教員が「櫂（かい）入れ」することで、それぞれが異なるキリストの香りを放っていくと語りました。

全体会での分団協議の報告後、伊藤委員による閉会礼拝で「本当の自由を与えるためにキリスト教学校は建てられている」とのメッセージを聞き、三日間の研修が終了しました。

参加した先生方の前向きで創造的なパワーに、実行委員もとても励まされました。恵み豊かな研修会が開催できましたことに感謝します。

島名恭子〈捜真女学校中学部・高等学部校長、新任教員研修会実行委員〉


磯貝曉成氏

〔参加者の声から〕

◇　◇　◇　◇

○3日間、キリスト教学校で働く教員の皆様といろいろな形で交流をもち刺激を受けました。特に閉会礼拝の「好きになることはできなくても愛することはできる」という言葉が印象に残りました。好きの上位の概念として愛するが来るように考えていたからです。しかし、相手をありのままに受け入れて無視しないことが愛することなのだということを思いながら、苦手だと感じる人々を愛してみようと考えました。研修が終わっても定期的に今回の分団協議や講演のメモを読み返し、今感じた気持ちを忘れないようにしたいです。

安川元啓〈青山学院横浜英和中学高等学校〉

関西地区 第66回夏期研修会

発題「わたしたちの取り組み
～様々な課題を持つ学生・生徒の支援～」

第66回夏期研修会が、8月7日（水）～8日（木）の日程で同志社大学今出川キャンパスを会場として開催されました。講師、事務局を含めて31名の参加者があり、例年より若干少ない参加数でした。

研修会は、頌栄保育学院理事長・院長の相澤弘典実行委員長の「網からネットワークへ」を題にしたメッセージの開会礼拝から始まりました。礼拝後、関西地区代理理事を務める中道基夫関西学院院長からご挨拶があり、発題に入りました。

今回の発題は「わたしたちの取り組み：様々な課題を持つ学生、生徒の支援」をテーマにして、三つの学校から40分ずつ発表がありました。最初は松山学院高等学校の吉田慎吾校長からの発表でした。吉田校長は、松山学院に赴任すると同時に生徒の不登校問題に取り組みました。それが、不登校生が入学できる「Newコース」を作ることと学校の雰囲気と態勢を一新することでした。その改革の成果は早くも現れました。既存のコースとNewコース共に入学者は大幅に増え、また生徒も教職員も学校を誇りに思うようになりました。

次に、YMCA学院高等学校の小林直樹校長代理と林貴子主任の発表がありました。広域通信制の同校は、生徒の誰もが安心して高校生活を送れるためにUL（学びのユニバーサルデザイン）という体制をもって学生一人ひとりに合理的配慮を行い、その事例と成果を紹介しました。

最後は、近江兄弟社高等学校の安藤敦子副校長とスクールソーシャルワーカーの野本実希氏による発表でした。お二人は、実に多様な課題と悩みを抱えている生徒たちを支援するために同校が整えている体制と施設を紹介しました。それからそのシステムがどのように動いて生徒たちを支えたかを具体的な事例を通して明らかにしました。

この三つの発題は、それぞれ参加者に強い刺激を与えるものでした。発

（3面につづく）

発題・吉田慎吾氏

公募

※採用予定日は特記以外25年4月1日です。

▽東北学院大学
職種＝建築構造学分野教授、准教授又は講師　1名
応募締切＝10月31日
問合せ＝☎022-354-8705

▽フェリス女学院大学
▼全学教養教育機構
職種＝英語教育　嘱託教員（講師）　1名
応募締切＝10月16日
問合せ＝☎045-812-8211

▽関東学院大学
▼情報学部（26年開設予定）＊理工学部、建築・環境学部も担当）
職種＝英語科目　教授、准教授又は専任講師　1名
採用予定日＝26年4月1日
応募締切＝10月25日
問合せ＝☎045-786-7860

▽山梨英和大学
▼人間文化学部人間文化学科
職種＝キリスト教関係科目（宗教主任）教授、准教授又は専任講師　1名
応募締切＝11月11日
問合せ＝h.furuya@yamanashi-eiwa.ac.jp

▽新島学園中学校・高等学校
職種＝①国語科　専任講師　若干名②数学科非常勤講師　1名
応募締切＝①11月29日②12月13日
問合せ＝☎027-381-0240

▽立教女学院中学校・高等学校
職種＝数学科、情報科専任教員又は常勤講師各1名
応募締切＝10月10日
問合せ＝☎03-3247-0905

▽女子聖学院中学校・高等学校
職種＝美術科　非常勤講師　1名
応募締切＝10月10日
問合せ＝☎03-3917-2277

▽捜真女学校中学部・高等学部
職種＝家庭科　非常勤教員　1名
応募締切＝10月13日
問合せ＝☎045-491-3686

▽横浜共立学園中学校高等学校
職種＝国語科、数学科、英語科、家庭科　専任教諭　各1名
応募締切＝10月25日
問合せ＝☎045-641-3785

▽神戸女学院中学部・高等学部
職種＝保健体育科　非常勤講師　1名
応募締切＝10月31日
問合せ＝☎0798-51-8570

▽広島女学院中学高等学校
職種＝地歴公民科　専任教諭又は常勤講師1名
応募締切＝10月18日
問合せ＝☎082-228-4131

▽関東学院六浦小学校
職種＝小学校教諭（契約教諭）　1名
応募締切＝11月30日
問合せ＝☎045-701-8285

▽フェリス女学院大学
▼文学部
職種＝嘱託副手　1名
採用予定日＝12月1日
応募締切＝10月18日
問合せ＝☎045-812-8211

▽（学）フェリス女学院
職種＝専任事務職員　若干名
採用予定日＝25年1月1日
応募締切＝10月17日
問合せ＝☎045-662-4512

▽（学）横浜英和学院
職種＝常勤事務職員（施設・経理担当）1名
応募締切＝10月31日
問合せ＝☎045-731-1901

▽（学）西南学院
職種＝①事務局専任職員（既卒）若干名②事務局契約職員（アーキビスト）1名
応募締切＝①10月27日②10月28日
問合せ＝☎①092-823-3734　②092-823-3217

（2面よりつづく）

題後、参加者は4つのグループに分かれて、発題の内容を受けて活発な議論を行いました。二日目のフィードバックの時間には全体的な質疑応答の中で、またグループセッションの分かち合いの中で熱い思いが交わされました。閉会礼拝では、同志社女子中高の聖書科・生田香緒里実行委員から「共に生きる」と題したメッセージがありました。

今回の研修会の中身は、同盟の関係者から直接実状を伺うものでした。グループセッションにも発題者もしくは発題の関係者が参加して、発題中には聞けなかった成果、事情や課題をより詳しく知ることができるなど、具体的で密度の高い研修会でした。

李 元重

〈同志社大学キリスト教文化センター、夏期研修会実行委員〉

◇ ◇ ◇ ◇

〔参加者の声から〕

○事例と、それに対する対応やポイントを共有できたのが良かった。

○大学にも配慮申請をする学生が多く、大学進学前の中高の状況を知ることができて良かった。

○学内だけで解決するのではなく、社会的資源にアプローチして連携していく大切さを感じた。

○キリスト教主義学校に勤める者として、その価値観や核となる部分に触れて二日間を過ごせた。

○高大連携の観点から、学生支援のヒントを与えられた。

○普段は勤務校の方針を基に過ごしているが、他校の様々な試みを知って新しい視野を得ることができた。

第9回全国災害支援連絡会議

熊本地震・2020年7月豪雨災害の被災地・被災者・支援者から学ぶ

今回の研修会は、熊本地震から復興を果たそうとする現場へ改めて赴き、体験からの学びを目的として企画しました。また昨年度からの構想で、オプショナルツアーとして2020年7月豪雨の被災地、球磨村での研修をプログラムに組み込み、気候変動による風水害についても考える企画としました。（8月9日に参加者12名で実施）

熊本YMCAにて

以下は、全国からの参加者・スタッフ29名で開催した8月7日（水）と8日（木）の報告です。

8月7日の会場はアクセスの利便性も考慮して、2021年に完成した熊本YMCA本館／グローバルコミュニティセンターにしました。熊本地震の教訓から、この建物には防災設備が備えられており、災害時には一時的に100～200人程度を収容できます。

研修は実行委員でもある坪井智司祭（松蔭中学校・高等学校チャプレン）による祈りと阪神淡路大震災の体験から「神さまによって災害から学ぶよう楔を打たれた」という説教の開会礼拝、開催校である九州ルーテル学院光永尚生院長の挨拶から始まりました。

講演は公益財団法人熊本YMCAの丸目陽子氏による『「避難所運営の実際」～2016年熊本地震・2020年豪雨災害～』というテーマでした。丸目氏は2016年4月～10月まで益城町体育館、2020年7月～10月まで旧多良木高校にてコロナ禍での避難所運営を担当しました。そこでの経験を通じて、被災者や支援者に寄り添う避難所運営について具体的に話されました。

丸目陽子氏

遠山健吾氏

その後、復興中の熊本城が見える会場に移動し、馬刺しなどの郷土料理を堪能しながら有意義な交流ができました。

8日はチャーターバスで益城町に移動、益城町社会福祉協議会で熊本地震、熊本県社会福祉士会災害支援委員会で豪雨災害の支援に携わった遠山健吾氏に講話と震災遺構谷川断層を案内していただきました。その後、西原村に移動し災害ボランティアとして関わり西原村に移り住んだ吉丸和男氏の案内で大きな被害を受けた大切畑地区を徒歩で見学、その後同地区老人会の方たちから地震当時のお話を聞くこともできました。

大切畑地区を歩く

午後は、南阿蘇の東海大学跡地にできた熊本地震震災ミュージアムKIOKU、阿蘇大橋崩落現場を見学し16時半ごろ熊本駅にて解散しました。

最高気温38度の暑さの中歩数計は1万歩を軽く超えていました。熊本ほどの暑さではないかもしれませんが、同じ時間に、能登半島では被災された方や復興に向けて汗を流している方がいることを考えました。

熊本地震震災ミュージアムKIOKUの中庭で

KIOKU見学

昨年度は台風接近のため急遽オンライン開催となりました。今年度、無事にすべてのプログラムを行うことができたことに感謝します。

西 章男

〈九州ルーテル学院大学、全国災害支援連絡会議実行委員長〉

関東地区 聖書科研究集会

「聖書の現代的解釈と理解」

8月16日（金）、関東地区聖書科研究集会をオンラインで行いました。当初は横浜共立学園中学校高等学校を会場に対面で行う予定でしたが、台風7号の影響により急遽、日本キリスト教会横浜海岸教会からZoom配信にて開催、プログラムは開会祈祷・講演・質疑応答・閉会祈祷とし、約30名が参加しました。

講師は日高嘉彦チャプレン（北星学園大学）、講演題は「聖書の現代的解釈と理解」でした。講演の前半では「聖書の伝統的な解釈と現代的解釈の違いは何か」「なぜ現代の社会や文化の中で新たな解釈が必要とされるのか」との問いが中心となり、後半では創世記1章・2章の創造物語から、現代を取り巻く環境問題やジェンダーに配慮した視点での聖書解釈についての考察を伺いました。印象的だったのは、従来のように歴史批評的に聖書を解釈するだけではなく、その限界点を認識し、解釈の手法の幅を広げる重要性についても触れていたことです。たとえば、レビ記の様々なタブーについて、聖書学だけで解釈することは困難ですが、文化人類学的な手法を取り入れることで新たな視座が与えられるように「聖書学×心理学」「聖書学×文芸学」など、様々な解釈の手法を用いることでより深く聖書を理解できることを学びました。

また、当日のレジュメには「聖書は神についての多種多様な証言集（多声性）」と記されていました。近年の聖書学的アプローチでは男性目線での聖書解釈に限定される傾向があります。しかし、聖書の時代以来、ユダヤ人もギリシア人も、奴隷も自由な身分の者も、男も女も、様々な人々が聖書に救いを求め、聖書は実際にその願いに応えてきた歴史と実績があります。現代ではフェミニズム、性的マイノリティー、エコロジー他、読者の置かれている状況が多様性に富む時代となったからこそ、それぞれのライフコンテキストを意識しつつ、聖書の証言に耳を傾けることの必要性を学ぶことができました。日々の授業の中で多種多様な背景をもった生徒たちと向き合うためにも、一人ひとりの声に聴き、聖書を共に学ぶことの大切さに気づかされた研修会となりました。

日高嘉彦氏

久保哲哉

〈聖学院中学校・高等学校チャプレン、聖書科研究集会実行委員〉

◇ ◇ ◇ ◇

〔参加者の声から〕

○授業で生徒たちに伝えるには、同じ聖書箇所であったとしても常に新しく知る、また他の視点から読んでみる姿勢を持たなければいけないと感じました。

○ユダヤ教の創世記の読み方が新鮮で、創世記の読み方に新しい光が与えられました。

○学校では日々の業務に追われ、じっくり注解書を読んだり勉強したりする時間が取れずにいましたが、自分自身の学びの必要性を痛感しました。

○（オンラインになり）今日の学びをシェアしたり、グループで互いの考えを出して聞き合い揉んだりして、礼拝の話や授業の教案作りまで出来なかったのが残念でした。

聖書のことば

滅びない言葉

北川　善也

「天地は滅びるが、わたしの言葉は決して滅びない。」　（マルコによる福音書13章28～31節）

少しずつしのぎやすくなり、秋の訪れを肌で感じます。葉が落ちていく街路樹を見て寂しさを覚える季節を迎えようとしています。そんな街路樹は葉を落とし切っても内部で着々と準備をし、枝々に蕾が芽生え始めたら、春到来のしるしであるということをわたしたちは知っています。

主イエスは、木々の変化によって季節を知るという一般常識を語りながら、様々な出来事に翻弄されつつ生きるわたしたちに対して、本当に大切なことを忘れていないかと問いかけられます。

目に見える世界は、刻一刻と移り変わります。わたしたちを取り囲むものの中で、何一つとして変わらないものはありません。樹齢何千年という木だって永遠に生き長らえるわけではなく、時の経過と共に朽ち果てていきます。そのような樹木になぞらえて、主イエスはわたしたちの命の問題を語られます。

今という時を謳歌しているわたしたちも、いつか必ず命の終わりを迎えます。わたしたちの回りに存在するすべては、時の経過と共に衰え、劣化していきます。しかし、主イエスは、時がどんなに移り変わろうとも残り続けるものがある、それは御自分の御言葉である、と言われます。

真に力ある主イエスの御言葉は、わたしたちを内側から、根本から新しくする命の源です。それゆえ、主イエスがお語りになる「互いに愛し合いなさい」という命の御言葉は、個人としての人間を造り変えるだけでなく、人間社会全体を造り変えていくのです。

どんなに世の中が揺れ動こうとも、人間存在の基盤が根こそぎ崩れ去るような出来事が起ころうとも、それですべてが終わりになるのではない。「互いに愛し合いなさい」という御言葉を受け取ったわたしたちの中に芽生え始めた愛の力を、主イエスは信頼し、「わたしの言葉はあなたがたの中で決して滅びない」と絶えず語りかけ、励まし続けてくださいます。　〈学校法人明治学院・学院牧師〉

第4回 教員リフレッシュ合宿

「立ち止まって 見つめなおそう」

第４回「教員リフレッシュ合宿」（教育者支援ネットワーク推進委員会）が、８月19日(月)～21日(水)の２泊３日、奈良県天川村洞川温泉あたらしや旅館に於いて、参加者・講師等14名で開催されました。近鉄吉野線下市口駅からバスで１時間20分、標高８２０ｍの場所であり、旅館に入って、畳に座ると「涼しいですね」「久しぶりにこんなに気持ちのよい風を感じる」という参加者の声が聞こえてきました。窓から見える木々の緑色、そばを流れる川のせせらぎが心地よい。

清流の里の洞川温泉

開会礼拝では、集まった一人ひとりが同盟加盟校に勤める者として仲間であることを感じました。その後、〝わたしのお気に入り〟を語りながら自己紹介をする「出会いの時」を持ち、交わりが広がっていきました。

２日目は、水口洋先生（日本聾話学校理事長、玉川聖学院理事）による発題から始まりました。Ⅰ「心と体をリフレッシュするために」、Ⅱ「教師の仕事を続けていくために～人とのかかわりの中で～」の各発題後には、振り返りと静まりのときとして、それぞれが心落ち着く場所で沈黙の時間を持ちました。立ち止まったことでやっと見えたこと、聞こえた声があり、また、振り返ることで、前を向くことができ、新たな力を得ました。自分のことだけでなく、建学の精神やスクールビジョンについても考え、先人との対話、そして祈りに導かれたのは私だけではなかったように思います。自分自身がほぐされていき、生徒たちの顔が次々と頭に浮かび、行動しようと決意できました。

水口洋氏

静まりの後、互いの意見を聞き合う「分かちあい」の時間を持ちました。水口先生の発題にあった「一人であること」が合宿で実現していたと思います。

その他、おいしい水を汲みに外へ出る、散策（ハイキング）をしながら様々な話をする、部屋から見える風景や音を堪能しながらゆったりするなど思い思いの時間を過ごし、また二宮一美先生（「くるみ心理オフィス」代表、元関西学院高中部カウンセラー）による声掛けやいくつかのセッションにより、さらに心と体の両方がリフレッシュされました。

車座になって語り合う

最終日には、まとめと閉会礼拝（長谷川洋一実行委員長／大阪女学院理事長）をもって、「またお会いしましょう」と帰路につきました。参加者からは「日常生活に戻り、自分の調子がいいと実感しています」という声が届いています。

勤務校のロビーには、華道部員が季節の花を活けるスペースがあり、この小さな空間は校内で自然と向き合うことのできる場所です。立ち止まって花を見る時、愛を感じます。そして、研修で出会った仲間を想いながら新たに力をいただいています。

中田路実
〈金城学院高等学校、教員リフレッシュ合宿実行委員〉

わたしたちの奉仕活動

祈りから奉仕へ

関西学院初等部

関西学院初等部の一日は礼拝から始まります。毎朝、児童・教職員５７０名がチャペルに集い、賛美と祈りを合わせ、聖書とメッセージに耳を傾ける時間は、子どもたち、教職員にとって最も大切な時間です。

この礼拝が子どもたちの「奉仕」の源となり、そこで聴き、考え、感じ、祈ったことが、子どもたちの歩みや具体的な活動につながっていきます。

今年の元日に起こった能登半島地震の後、３学期が始まるとすぐに募金の呼びかけが始まりました。１月16日～18日の３日間、宗教委員会の子どもたちを中心に募金活動が行われ、保護者の協力もあり、３日間で６１５，３６１円の募金が集まりました。

報道で被災地の状況が取り上げられる頻度が減少する中、朝の全校礼拝、クラスでの昼礼、終礼で能登半島地震の被災者の方々のために祈らない日はありませんでした。またウクライナをはじめ、世界中で続く戦争の被災者の方々のためにも、子どもたちがチャペル礼拝や各クラスの礼拝で自主的に祈る姿に、深い尊さを感じました。

募金活動

時が経つにつれ、被災地の情報が減少し、多くの人の記憶から被災者の方々のことは薄れていきます。そのような中で、子どもたちが被災者の方々のために祈り続けることには大きな意義があります。

今年７月、能登半島地震の被災者支援のため、２回目の募金活動が行われました。福祉委員会の子どもたちを中心に実施され、３６０，４０１円が集まりました。この活動は、子どもたちが半年間続けてきた祈りの具現化でもありました。

募金活動を行い、多くの支援金を集めることには大切な意味があります。しかし、そこで苦しんでいる人たちの心に少しでも寄り添い、祈り続けることこそが、キリスト教主義学校におけるもっとも大切な子どもたちの奉仕の業なのではないかと思います。

チャペルでの祈り

「祈り続ける」ことは、「忘れない」ということです。以前、東日本大震災の被災者の方々のために募金活動や救援物資の送付を行った際、子どもたちは南三陸町の小学生たちに手紙を書きました。３年生の子どもが手紙に記した一文が、今でも鮮明に記憶に残っています。

教室での祈り

「ぼくはお祈りをして、皆さんのそばにいます」。

子どもから、祈りの本質を教えられたように感じました。

キリスト教主義学校では、どの学校も祈りを大切にしていると思います。子どもたちは日々、自分や仲間、家族、学校、地域の人々、社会の様々な人々、特に困難に直面している人たちのために祈ります。

どのような形でその祈りが叶えられるのか、それは私たちには分かりません。祈りが叶えられないと感じることも少なくありません。しかし、確かなのは、祈る子どもたち自身が確実に変化していくということです。祈りを通して、誰かの苦しみを忘れず、助けを必要としていることを心に留め続ける。そのことが次の「奉仕」へとつながっていくのです。

古切手回収（関西学院大学の学生との共同作業）

福万広信
〈関西学院初等部長〉

事務局だより

９月も半ばを過ぎて夜の帰り道、涼風とコオロギの声にようやく秋を感じました。しかし衣替えのタイミングが曖昧な昨今、服装選びが難しくなります。天候が変わりやすく気温差の大きい時季、ご自愛ください。

全国研修会では各地の会場校を訪ねます。通学路の街並、そして正門、校舎、礼拝堂、植栽等々、キャンパスには豊かな伝統と校風が満ちています。事務室の親切な応対や生徒の自然な挨拶はキリスト教学校に共通しています。今夏も多くの出会い、学びと気づきに感謝です。

事務局長

＜行事予定＞

※予定は状況により変わることがあります。

11／1～2　第66回学校代表者協議会（啓明学院中学校・高等学校）
9　第10回キリスト教看護教育推進会議　（活水女子大学）
30　キリスト教学校教育懇談会 第22回講演会　（オンライン）

2025年

1／17～18　第67回小学校代表者研修会（北陸学院小学校）
6／13～14　第113回定時総会（北星学園大学）

キリスト教Q&A

―キリスト教の理解を深めるために―

Q.聖書が言う「エゴサ」って？

沖崎　学
（金城学院高等学校 宗教主事）

信仰の父と呼ばれた、アブラハムさん。そのアブラハムさんと結婚したのが、サラさん。アブラハムさんが75歳のときに、「カナンの地に向かえ！」と神さまは仰る。砂漠を迂回して行ったら、カナンまでは2000キロも離れています。ざっと、北海道から沖縄まで。しかし、アブラハムさんは、その地へと出発します。65歳のサラさんも、です。アブラハムさんもスゴいけど、サラさんもスゴい。こんな２人ですから、「どんな試練困難も、夫婦、力合わせ、神さまへの信仰をパワーにして、人生という旅路を続けた」と言いたい。が、そんなことなく、むしろ、逆で。私たちと、さほど変わらないんです。「もう、どうにもならない」というところで、いつも神さまの出番。神さまの愛の介入がなかったら、すぐにも終わってしまう旅路です。

毎回、２人にとって、これ以上ない解決策で、神さまは働いてくださるんです。そんな２人に、とっておきの大きな愛を、神さま、ご用意してくださっていました。アブラハムさん100歳、サラさん90歳のとき。２人は、「あなた方に、子どもが与えられる！」との神さまの言葉を聞くんです。それまで、子どもが与えられてなかった２人にとって、予想もしない、あり得ない、嬉しい言葉。２人の人生への愛の介入です。しかし、サラさんは、こともあろうに、「笑う」んです。嘲笑です。馬鹿にして笑ったんです。意地悪で、冷たい「笑い」です。実に、サラさんだけでなく、アブラハムさんまでも、「笑う」んです。でも、神さまは、そんな２人の「笑い」を打ち破るんです。その翌年、約束通り男の子が与えられます。

それも、神さまは、「その子をイサクと名付けよ！」と言うんです。「イサク」とは「笑い」って意味。エモいでしょ。２人の嘲笑に代えて、神さまは「イサク」を通して、本当の「笑い」を２人に手渡されるんです。２人の冷たい「笑い」を、温かな、感謝溢れる「笑い」にしてくださる。２人にだけでなく、神さまは、私たちの人生のあらゆる場面にも愛の介入をしてくれています。私たちが、冷たい、意地悪な「笑い」なんかでなく、温かで、感謝に溢れる「笑い」に、いつも生きるためです。ぜひ、エゴサ（自己検索）してみてください。「〇〇（自分の名前）の人生　スペース　神さまの愛」と検索バーに入力してみるのです。神さまの愛の介入は、「あのときも？」、「このときも！」と、日々、びっくりするほど、ヒットします。

（創世記18、21章より）